

序

近年、医療事故に対する社会の関心は高まっています。医療事故は薬に関連する事故が大きな割合を占めており、薬剤師が医療事故のセーフティーマネジャーやリスクマネジャーとしての役割を期待されています。

実際の医療現場では、医薬品がさまざまな場所で使用され、インシデントやアクシデントが発生しています。「医薬品のあるところ薬剤師あり」という心構えで、薬剤師は医薬品が患者さんに安全かつ適正に使用されるための責任があります。

2010年からスタートする長期実務実習コアカリキュラム内にリスクマネジメントの項目があり、6年制教育を受けた薬剤師は、社会や医療現場からリスクマネジメントに対する知識をもつた、今までの薬剤師以上の活躍を期待されています。

薬剤師によるリスクマネジメントで一番大切なことは、患者さんに医薬品の誤投与や誤使用が起きないように、未然に防ぐことです。また、有害事象が重篤化しないように初期症状をモニタリングすることも重要です。医薬品はすべての医療従事者が使用する共通のものですが、それぞれの職種で認識の違いがあります。薬剤師は一番薬の怖さを知っており、薬理学や薬物動態学などの薬学的知識を活用することにより、薬の危険を回避することができます。薬剤師は、薬剤師のミスによって患者さんを死に至らしめることがあることを肝に銘じなければなりません。また、インシデントやアクシデントはいつでも、どこでも、だれにでも起こる可能性があるために、リスクマネジメントに関する多岐にわたる知識をしっかりと習得する必要があります。

人間はミスを犯す生き物であることを自覚し、自分はミスなど犯すはずがないなどと過信してはいけません。リスクがどこに隠れているか、どのような時に起こりやすいかを把握していれば、インシデントを未然に回避することができます。また、仕事のできる上司や他の医療従事者の業務でもミスがあるかもしれないという疑いの目をもつことが大切であり、チームや組織で患者さんに不利益を被らないようにインシデントを防止していくことが重要です。

本書では、若手薬剤師や薬学生向けに、薬剤師が行っている日々の業務のなかで、リスクマネジメントについて知っておかなければならぬ基本的な内容や、インシデントを回避するためのポイントを、業務の流れに沿って解説しています。あくまでもポイントのみを解説していますので、興味をもった内容に関してはさらなる学習のきっかけにしてください。

また、病棟業務に関する詳細な内容については、羊土社発行 ビジュアル薬剤師実務シリーズの3、4巻を参考にしていただきたいと思います。

2010年5月

編者を代表して
安 武夫